4.5.3 地質と崩壊地分布

地質分布と崩壊地分布との関係について整理した。地質図は独立行政法人産業技術総合研究 所地質調査総合センターが公開しているシームレス地質図を参照した。分布図を以下に示す。

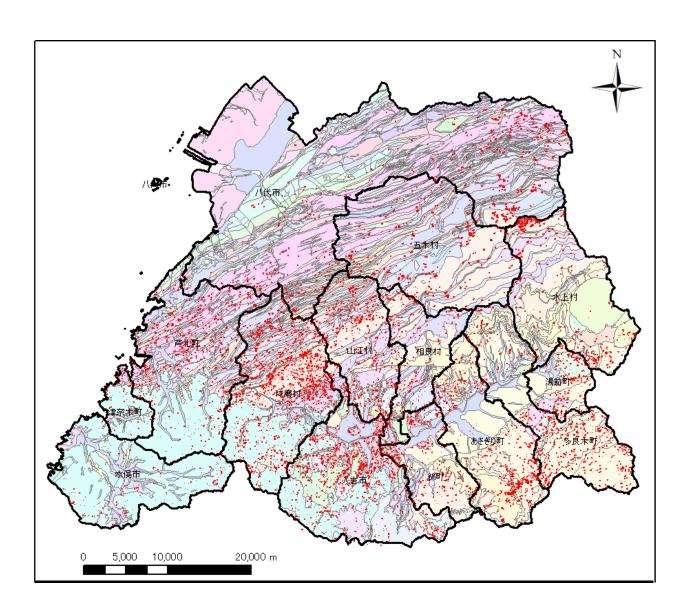


図 4.5.9 崩壊地分布と地質分布



図 4.5.10 地質分布の凡例

地質ごとの崩壊地数および崩壊地面積を表 4.5.3 に示す。表は崩壊面積率の高い順に並べている。最も崩壊面積率が高いのは中-後期ジュラ紀の付加体の玄武岩ブロックである。順に中期始新世-前期中新世(PG2-4)の海成堆積岩類、後期白亜紀(K2)の付加コンプレックスの砂岩優勢砂岩泥岩互層となっている。

表 4.5.3 地質ごとの崩壊地数と崩壊地面積

表 4.5.3 地質ごとの崩壊地数と崩壊地面積								
地質	分布面積 (m^2)	崩壊箇所数	崩壊面積 (m^2)	単位面積当 たりの箇所 数(箇所 /km ²)	崩壊面積率			
中-後期ジュラ紀 (J2-3) の付加コンプレックスの玄武岩ブロック (石炭紀-ペルム紀)	1, 264, 153	8	6, 821	6. 3	0. 54%			
中期始新世-前期中新世 (PG2-4) の海成堆積岩類	5, 485, 917	86	24, 709	15. 7	0. 45%			
後期白亜紀(K2)の付加コンプレックスの砂岩優勢砂岩泥岩互層	19, 385, 264	252	86, 742	13. 0	0. 45%			
中期始新世-前期漸新世 (PG2-PG3) の付加コンプレックスの砂岩優勢砂岩	671, 026	4	2, 708	6. 0	0. 40%			
泥岩互層								
ジュラ紀中-後期(J2-3)の海成泥岩優勢層 後期ジュラ紀 並期立西紀(J2-X1)の仕加コンゴレックスの五匹岩ゴロッ	12, 486, 884	87	44, 890	7. 0	0. 36%			
後期ジュラ紀-前期白亜紀(J3-K1)の付加コンプレックスの石灰岩ブロック(ペルム紀-前期白亜紀)	56, 656, 779	406	198, 291	7. 2	0. 35%			
中期始新世-前期漸新世 (PG2-PG3) の付加コンプレックスの等量砂岩泥岩 互層	16, 873, 393	161	57, 306	9. 5	0. 34%			
後期白亜紀(K2)の付加コンプレックス中のチャートブロック(白亜紀)	443, 848	5	1, 353	11. 3	0. 30%			
中期始新世-前期漸新世 (PG2-PG3) の付加コンプレックスの基質	163, 379, 300	1, 208	478, 884	7.4	0. 29%			
中期始新世-前期漸新世 (PG2-PG3) の付加コンプレックスの砂岩層	10, 625, 168	69	28, 769	6. 5	0. 27%			
後期ジュラ紀-前期白亜紀 (J3-K1) の付加コンプレックスの基質 前期白亜紀-後期 (K1-2) の付加コンプレックスの等量砂岩泥岩互層	33, 865, 072 259, 388, 755	451	85, 517 561, 687	13. 3 8. 7	0. 25% 0. 22%			
前期白亜紀-後期(KI-2)の付加コンプレックスの安重砂岩泥岩互眉 前期白亜紀-後期(KI-2)の付加コンプレックスの玄武岩ブロック(後期		2, 261						
ジュラ紀-前期白亜紀)	6, 176, 360	42	13, 209	6.8	0. 21%			
前期更新世(01)の海成または非海成堆積岩類 前期白亜紀-後期(K1-2)の付加コンプレックスの礫岩層	7, 520, 253 2, 867, 862	216 53	16, 022 6, 044	28. 7 18. 5	0. 21% 0. 21%			
後期中新世-鮮新世 (N3) の非アルカリ珪長質火山岩類	21, 881, 684	442	44, 641	20. 2	0. 21%			
後期白亜紀 (K2) の付加コンプレックスの基質	99, 747, 294	387	175, 116	3. 9	0. 18%			
中-後期ジュラ紀(J2-3)の付加コンプレックスの基質	8, 601, 983	24	15, 068	2. 8	0. 18%			
後期更新世(Q3)の火山岩類(非アルカリ火砕流)	33, 085, 045	750	54, 362	22. 7	0. 16%			
中-後期ジュラ紀 (J2-3) の付加コンプレックスのチャートブロック (三畳紀-中期ジュラ紀)	76, 214, 515	356	123, 299	4. 7	0. 16%			
後期白亜紀 (K2) の付加コンプレックスの玄武岩ブロック(白亜紀)	3, 485, 023	13	5, 415	3. 7	0.16%			
ジュラ紀中-後期(J2-3)の海成砂岩優勢層	11, 071, 202	46	16, 863	4. 2	0. 15%			
前-中期ジュラ紀(J1-2)の付加コンプレックスの石灰岩ブロック(石炭紀 -ペルム紀)	14, 274, 536	64	20, 831	4. 5	0. 15%			
前期白亜紀-後期(K1-2)の付加コンプレックスの砂岩層	74, 874, 288	957	107, 956	12. 8	0. 14%			
前期白亜紀-後期(K1-2)の付加コンプレックスの基質	74, 909, 040	378	101, 486	5. 0	0. 14%			
中期始新世-前期漸新世 (PG2-PG3) の付加コンプレックスの玄武岩ブロック(暁新世-前期始新世)	109, 488	1	143	9. 1	0. 13%			
中-後期ジュラ紀(J2-3)の付加コンプレックスの砂岩層	131, 302, 761	638	164, 989	4. 9	0. 13%			
後期白亜紀(K2)の付加コンプレックスの砂岩層	23, 525, 258	68	29, 207	2. 9	0. 12%			
前-中期ジュラ紀(J1-2)の付加コンプレックスの基質	220, 053, 699	820	260, 335	3.7	0. 12%			
ジュラ紀中-後期(J2-3)の海成堆積岩類 前期白亜紀-後期(K1-2)の付加コンプレックスのチャートブロック(後期	62, 427, 356	241	71, 565	3.9	0. 11%			
ジュラ紀-前期白亜紀) 三畳紀中-後期(TR2-3)の海成堆積岩類	1, 609, 685 17, 793, 847	10 55	1, 754	6. 2 3. 1	0. 11% 0. 10%			
後期ジュラ紀-前期白亜紀(J3-K1)の付加コンプレックスのチャートブ	12, 683, 662	84	12, 603	6. 6	0. 10%			
ロック(ペルム紀-前期白亜紀) 中期更新世(Q2)の火山岩類(非アルカリ火砕流)	39, 868, 986	589	39, 142	14. 8	0. 10%			
前-中期ジュラ紀(J1-2)の付加コンプレックスの砂岩層	13, 661, 837	42	13, 040	3. 1	0. 10%			
前-中期ジュラ紀 (J1-2) の付加コンプレックスのチャートブロック (石炭紀-後期三畳紀)	28, 367, 868	72	21, 324	2. 5	0. 08%			
前期更新世(Q1)の非アルカリ苦鉄質火山岩類	41, 754, 364	336	30, 881	8. 0	0. 07%			
ジュラ紀前期(J1)の海成堆積岩類	7, 170, 876	27	5, 177	3.8	0. 07%			
後期ジュラ紀-前期白亜紀(J3-K1)の付加コンプレックスの玄武岩ブロック(ペルム紀)	13, 247, 181	81	8, 507	6. 1	0. 06%			
後期更新世-完新世(H)の砂丘堆積物	304, 476	2	167	6. 6	0.05%			
超苦鉄質岩類(超塩基性岩:蛇紋岩:オフィオライト)	22, 787, 662	31	12, 482	1.4	0. 05%			
後期更新世(Q3)の中位段丘堆積物	19, 660, 633	151	10, 736	7.7	0. 05%			
中期更新世(Q2)の高位段丘堆積物	15, 797, 429	138	8, 377	8. 7	0. 05%			
後期白亜紀 (K2) の付加コンプレックスの等量砂岩泥岩互層 終期再発出。完新世 (A) の高性地 (会・岸鉄) 性 種物	14, 499, 128 8, 444, 836	14	7, 616	1.0	0. 05% 0. 05%			
後期更新世-完新世(H)の扇状地(含:崖錐)堆積物 湖水・河川・海など	10, 373, 892	26 36	4, 057 3, 537	3. 1 3. 5	0. 05%			
後期中新世-鮮新世 (N3) の非アルカリ苦鉄質火山岩類	359, 762, 873	2, 025	117, 097	5. 6	0. 03%			
三郡―智頭変成岩類の泥質片岩	10, 321, 670	25	3, 309	2. 4	0. 03%			
中-後期中新世(N2)の珪長質深成岩類	37, 303, 838	53	10, 938	1.4	0. 03%			
前期白亜紀(K1)の海成堆積岩類	40, 693, 590	114	11, 252	2. 8	0. 03%			
前期白亜紀(K1) の海成砂岩優勢砂岩泥岩互層	25, 468, 299	25	6, 658	1.0	0. 03%			
後期更新世-完新世(H)の海成または非海成堆積岩類	155, 509, 462	613	38, 295	3. 9	0. 02%			
前期更新世(Q1)の非アルカリ珪長質火山岩類 ペルム紀(P)の海成堆積岩類	12, 444, 661 39, 275, 352	51 35	2, 870 9, 008	4. 1 0. 9	0. 02% 0. 02%			
古生代(Pz)の深成岩類(珪長質および苦鉄質)	7, 295, 639	7	1, 537	1.0	0. 02%			
前-中期ジュラ紀 (J1-2) の付加コンプレックスの玄武岩ブロック (石炭紀-ペルム紀)	6, 454, 851	3	1, 315	0. 5	0. 02%			
前期白亜紀(K1)の海成礫岩層 寺野変成岩類(m1/低-中圧型)	11, 743, 588 7, 954, 408	17 6	2, 068 1, 276	1. 4 0. 8	0. 02% 0. 02%			
守野変成石類 (MI / ME-中圧型) 後期中新世-鮮新世 (N3) の火山岩類 (非アルカリ火砕流)	5, 227, 318	12	1, 276	2. 3	0.02%			
後期中新世-鮮新世(N3)の海成または非海成堆積岩類	161, 989	1	13	6. 2	0.01%			
後期更新世(Q3)の低位段丘堆積物	74, 419, 010	128	5, 735	1. 7	0.01%			
ペルム紀(P)の付加コンプレックスの基質	9, 664, 365	3	549	0. 3	0. 01%			
三郡-智頭変成岩類の苦鉄質片岩	13, 884, 264	4	566	0. 3	0. 00%			
ペルム紀(P) の石灰岩層	6, 035, 292	1	216	0. 2	0.00%			
前期白亜紀(K1)の海成砂岩泥岩互層 完新世(H)の人工改変地	6, 811, 016 80, 722, 220	1 6	194 605	0. 1 0. 1	0. 00% 0. 00%			
元初に 川 ソハエ以及地	00, 122, 220	U	000	J V. I	0.00%			

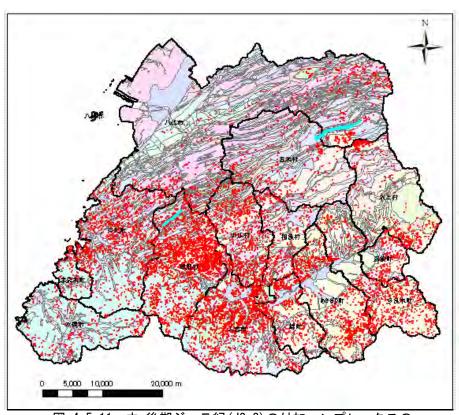


図 4.5.11 中-後期ジュラ紀(J2-3)の付加コンプレックスの 玄武岩ブロック(石炭紀-ペルム紀)の分布域

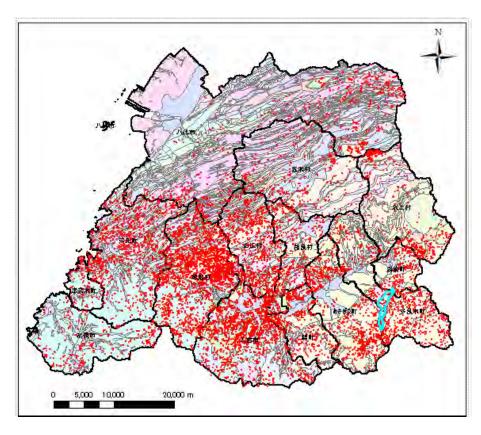


図 4.5.12 中期始新世-前期中新世(PG2-4)の海成堆積岩類の分布域

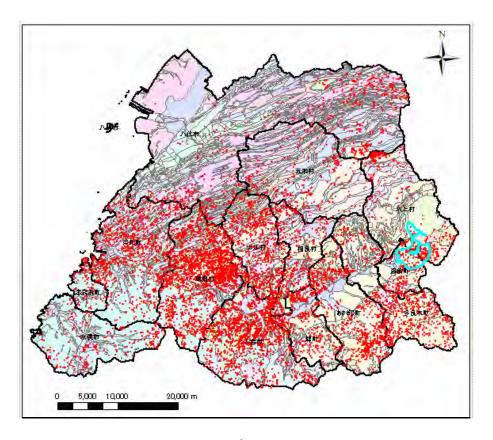
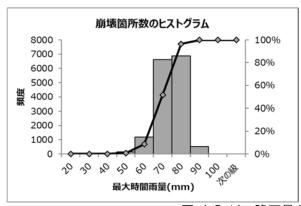


図 4.5.13 後期白亜紀(K2)の付加コンプレックスの砂岩優勢砂岩泥岩互層の分布域

4.5.4 降雨との関係

雨域と崩壊地分布との関係について整理した。降雨量は気象庁の雨量観測所の値を引用した。 解析に用いた降雨データの期間は、令和2年7月1日0時から令和2年8月2日24時までであ る。上記観測期間の時間雨量、日雨量、連続雨量の最大値を使って等雨量線図を作成し、それぞ れの降雨と崩壊箇所数との関係を整理した。

最大時間雨量を見ると 70~80mm/h の範囲に約9割の崩壊地が分布する。日雨量を見ると350~400mm/day の範囲に44%の崩壊地が分布する。連続雨量で見ると400~500mm の範囲に68%の崩壊地が分布する。



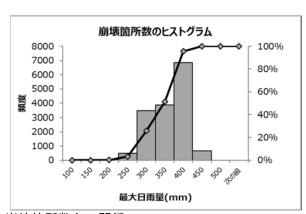


図 4.5.14 降雨量と崩壊箇所数との関係 (左:最大時間雨量、右:最大日雨量)

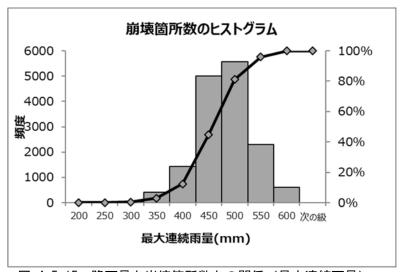


図 4.5.15 降雨量と崩壊箇所数との関係 (最大連続雨量)

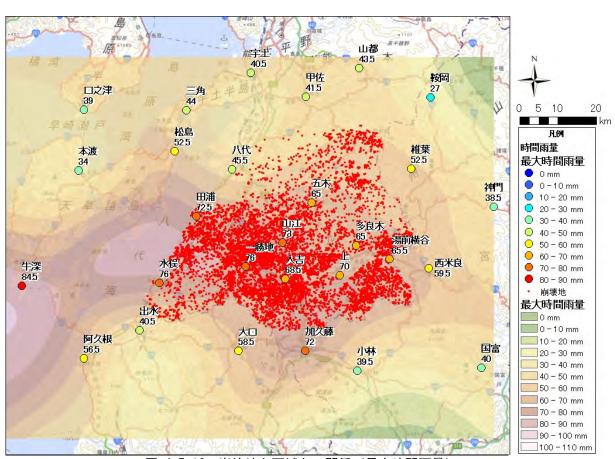
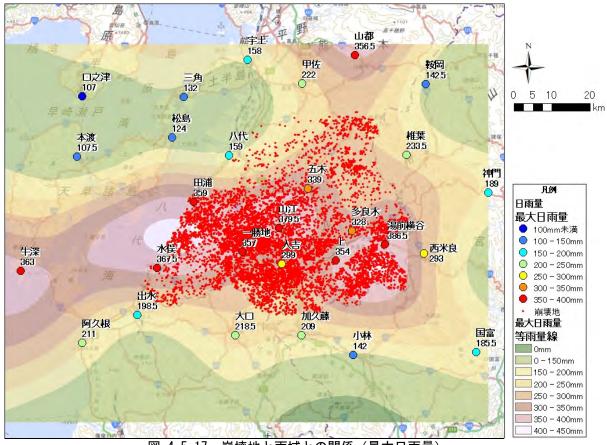


図 4.5.16 崩壊地と雨域との関係(最大時間雨量)



崩壊地と雨域との関係(最大日雨量) 図 4.5.17

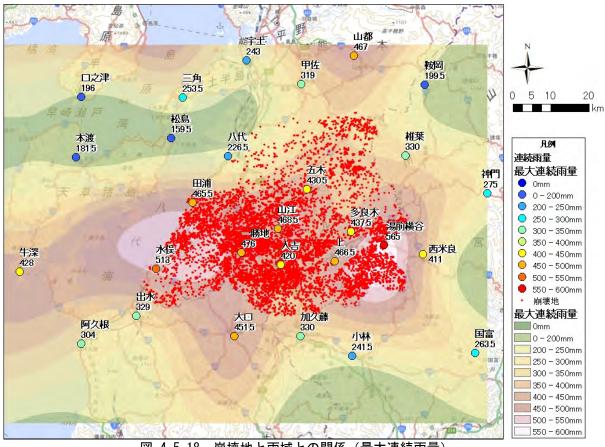


図 4.5.18 崩壊地と雨域との関係(最大連続雨量)

4.5.5 生産土砂量の推定

崩壊地の範囲を切り抜いて差分の集計を行った。差分量を計算するとマイナス約82万㎡だった。この量が生産された土砂量と見ることができるが、この差分量はプラス分が相殺された量となっている(土砂堆積量がカウントされている)ため、実際の生産土砂量はこの値よりも大きな値であると推測される。

公 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·									
市町村名	町村面積 (km ²)	差分値 (m/0.5m ²)	集計メッ シュ面積 (m ²)	差分量 (m ³)	単位面積あ たりの差分 量 (m^3/km^2)				
芦北町	233. 9	-1, 431, 979	0. 25	-357, 995	-1, 530				
球磨村	207. 5	-1, 781, 089	0. 25	-445, 272	-2, 145				
津奈木町	34. 1	-98, 997	0. 25	-24, 749	-726				
合計	475. 6	-3, 312, 065	0. 75	-828, 016	-1, 741				

表 4.5.4 町村毎の差分量

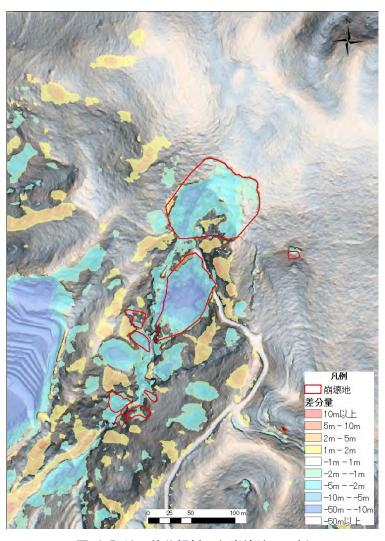


図 4.5.19 差分解析した崩壊地の一例

4.5.6 判読データを活用する際の留意点

本業務で実施した崩壊箇所等位置図は以下の方法により作成している。

■作成方法

- ・レーザ計測時に取得したオルソ画像から今回降雨で発生したと判断する崩壊地、土砂の流 送区間、巨石、亀裂を抽出
- ・微地形図から崩壊地形状をポリゴン化、流送区間は侵食痕跡を根拠に区間設定しポリゴン 化(ライン)、巨石は分布地点をポリゴン(ポイント)化、巨石と疑われるものおよび亀裂に ついては微地形図上で判断してそれぞれポリゴン化

今後、判読成果を活用する際には以下の点に留意すべきと考える。

■判読成果を活用する際の留意点

- ・今回の成果は単時期のオルソ画像(光学写真)で新規と判断している。参照した降雨前の画像は必ずしも災害を引き起こした降雨の直前に撮影されたものではないこと、およびGIS上で新旧画像の重ね合わせをしているわけではないため、判読した崩壊地や流送区間、巨石、亀裂の中には降雨前に存在していたものが含まれている可能性がある。
- ・崩壊地等の分布は机上のみであり、現地確認は行っていない結果である。
 - →規模の小さな崩壊地は現地では崩壊地ではなく裸地である可能性があることに留意が 必要である。
 - →巨石と疑われるものは微地形図の地形の起伏形状のみで判断していることから、現地 では巨石でない可能性があることに留意が必要である。
- ・ 今回の業務では土砂堆積域を判読していない。
 - →今回の成果は崩壊から堆積に至る一連の土砂移動分布を捉えているわけではないこと に留意が必要である。
- ・流送区間はラインポリゴンで作成している。
 - →差分解析による土砂収支を算出するのであれば、流送区間のポリゴンが必要と考える。
- ・別冊資料は縮小印刷で製本しているので図面の縮尺表示が実際と異なる。
 - →判読結果を図面上で計測する際には留意が必要である。

4.5.7 地形変化量を解釈する際の留意点

地形変化量は以下の方法により算出している。

■算出方法

- ・災害前は平成 21 (2009) 年度~平成 25 (2013) 年度の DEM と、災害後は令和 2 (2020) 年度の DEM を重ね合わせて、その標高値の変化量を抽出している。
- ・計測期間の差は、7~11年間となっている。

■地形変化量を活用する際に留意点

- ・地形の変化量は、令和2年7月豪雨以外で発生した(この災害以前に発生した)崩壊地を 含んだ値となっていることに留意が必要である。
- ・災害前と災害後のデータでは、オリジナルデータからグラウンドデータを作成する際のフィルタリングの違いがあり、それが地形変化であるかのように表現されている可能性があることに留意が必要である。
 - →災害前の地形と災害後の地形を図面上で比較する(下図)と、災害前の地形は表面が 滑らかに表現されており、災害後の地形はより細かな地形が表現されている。
 - →災害前後のオルソを見ると植生状況に大きな変化は確認できない。
- ・樹木の下の状況はオルソでは確認できないので、オルソ画像で変化が確認できない範囲で 地形変化量が出ている範囲(下図の赤丸の範囲)で現れている地形の変化がどのようなも のであるかを知るためには、現地での確認が必要であることに留意が必要である。

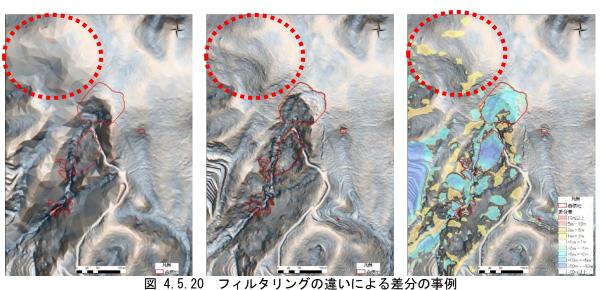


図 4.5.20 フィルダウングの違いによる差別の事例 (左:災害前の微地形図、中央:災害後の微地形図、右:地形変化量図)

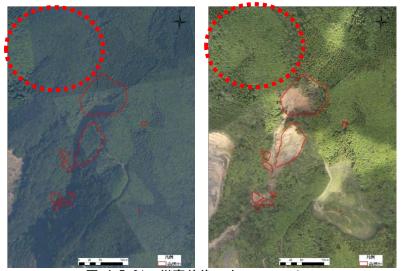


図 4.5.21 災害前後のオルソフォト (左:災害前、右:災害後) (オルソ画像をみると地被状況の顕著な変化は確認できない。)